

大熊手小熊手それに百の素手

貞勝

【秀句鑑賞】

上五、中七、下五のそれぞれに「手」を入れ、リフレインの効果余すことなく発揮させたものである。この畳み掛けるような勢いのある句立ての素晴らしさが、多くの賛同者を引きつけたのであろう。

評者も予選段階ではチェックしていたが、最終的には本選五句にとりきれなかった。その原因は、中七にある「それに」の散文的な措辞である。これによって掲句は画竜点睛を欠くものとなっている。また、「百の素手」は拝殿に向かい奔る参拝者なのか、あるいは、手締めの中にいる人の数であろうか。熊手巾には手締めは欠かせないから、手締めの手と考えたい。店の主人と若衆とで四、五人、これに買い手側の三、四人。交渉が成立して、威勢の良い手締めが始まったのであろう。俳句では「数字」は句にインパクトを与え、句を引き締める手段としてよく使われる。このとき注意しなければならないのは、あまり実態と遊離した数字を用いると、音調面では良くても、句意がつかみ難くなるというジレンマである。

掲句がもしも、「大熊手小熊手締めて十の素手」というようになっていたら、迷いなく特選句に選んでいたと思うが。

流れゆく人は砂粒冬の川

守

【自句自解】

街に出て人の行き交う雑踏を見ていると、そこに一本の川の流れを感じてしまう。川は上流の急流域であれば勿論として下流の緩流域であっても、その底層部では無数の砂利や砂粒が翻転しながら絶え間なく流れている。

光り輝く人生の絶頂期にある人、現役は引退したが趣味や勉学に充実した毎日を通り過ぎていく人、不運にも事故や災厄、病気に遭遇しそれとの闘いに全エネルギーを日々注がなければならぬ人、あるいは肉体的にも精神的にも絶望的な状況にある人など、様々な境涯にある人々を何事もなかったように包み込み、川は静かに流れているのである。冬の川なればこそこの思いはより強くなる。

冬薔薇の土盛りあがる日和かな

秀一

【秀句鑑賞】

小春日和のとある一日、冬薔薇を眺めていた作者の視線は、薔薇の根元の土に止まった。薔薇の茎を支える土が盛り上がっていたのである。冬薔薇の勢いが良く、その根がよく張っているのである。冬薔薇の生命力、生命活動を根方の土の盛り上がりに見て取ったのである。

俳句で花卉類を題材にするとき、ともすれば花の美しい姿かたちを形容することに腐心し勝ちであるが、その花卉を支える周辺のものにも観察の目を向けると、素晴らしい句材が飛び込んで来るものである。

【秀句鑑賞】

バスや電車にある優先席 (priority seat) という命名には、席を譲る方の立場であったときも、また、席を譲られる方の立場になったときも、この priority に priority right (優先権) を連想するので心理的に少し抵抗感がある。

杖を突いているなどの外見から判断されて譲られるのは別として、未だ十分に若いと自負している場合に席を譲られて仕舞ったときのショックは少なくない。作者も普段ならば若干の抵抗を感じるれるのであろうが、小春日のゆったりとした気分にある今日ならば、若い人の気持ち素直に受け容れ、ありがたいの会釈をして着席されたのである。

【添削コーナー】

【原句】

諍い後マウス揺する手固き口

田鶴子

今月から参加された田鶴子さんの意欲的な句である。無季の俳句であったため、有季定型のこの句会では皆に素通りされたが、自分の心の有り様をパソコンのマウスの扱いに託して表そうとしているのが良い。ただ、俳句は十七音の短詩形であるので、あまり多くの題材を盛り込まない方が良い。マウス揺する「手」と固き「口」である。

「手」の方を残して、「口」の部分に季語を入れると、次のようになる。

【添削句】

諍いてマウス揺される手の寒さ